

特集「新組織学シリーズⅠ：最新の皮膚科学」 によせて

佐藤 伸一

(東京大学大学院医学系研究科皮膚科学)

皮膚は人体をおおい、外界との境界をなすが、単なる隔壁ではなく、それ自体生命の保持に絶対不可欠の多彩な機能を営む重要な臓器である。また、皮膚は人体最大の臓器でもあり、その面積は成人で平均 1.6 m^2 、皮膚のみの重量は3 kg弱、皮下組織も加えると約9 kgで体重の14%に及ぶ。皮膚の機能としては、対外保護作用を有することはいうまでもないが、加えて体温調節作用、知覚作用、エクリン汗腺・アポクリン汗腺・脂腺からの分泌排泄作用、コレステロール・ビタミン D_3 などを合成する作用、多様なサイトカインの産生による免疫調節機能など、生体に必須の機能を担っている。

前述のような皮膚の古典的な機能のなかでも、特に皮膚は外界と直接接する臓器であることから、免疫が展開される重要な場であることが認識されている。この観点から皮膚免疫を可視化する試みも広く行われており、本田哲也先生(浜松医科大学)に解説していただいた。また、脂質代謝という観点から皮膚の重要性、そして疾患との関連性については住田隼一先生(東京大学)に触れていただいた。

皮膚は様々な疾患が生じる場でもある。特にアトピー性皮膚炎では皮膚バリア機能の低下によって、アレルゲンの経皮感作が生じ、その経皮感作がアレルギーーマーチを誘発することが知られており、皮膚バリア機能のアレルギーにおける重要性が認識されつつある。このあたりの話題については久保亮治先生(慶應義塾大学)に解説していただいた。更には、近年様々なサイトカインに対する生物学的製剤の導入により、その病態が明らかにされつつある疾患として乾癬がある。ヒトで特定のサイトカインを抑制することは、ある意味ノックアウトヒューマンを作製することにはかならず、そのような過程で明らかとなってきた乾癬の病態について、鎌田昌洋先生(帝京大学)に詳述いただいた。また、免疫チェックポイント阻害薬であるニボルマブが初めて臨床に導入された疾患が悪性黒色腫であり、その後、悪性黒色腫に対する治療は飛躍的に進歩した。その悪性黒色腫に対する新たな治療ターゲットについて猪爪隆史先生(千葉大学)にまとめていただいた。その他、皮膚科学の最新のトピックスについて多くの先生に解説いただき、この場をお借りして御礼申し上げたい。本稿が皮膚科学の新たな局面を認識していただくきっかけになれば幸いである。